

新聞投書の教育的活用に向けた調査・研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2010-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/4500

平成21年3月30日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520304

研究課題名（和文） 新聞投書の教育的活用に向けた調査・研究

研究課題名（英文） Letters to the editor's column in the newspapers and their educational application

研究代表者

熊谷 滋子 (KUMAGAI SHIGEKO)

静岡大学・人文学部・教授

研究者番号：30195515

研究成果の概要：本研究において、次の2点が明らかになった。1つは、1998年から2008年に発行された新聞投書の文体や内容が、ジェンダーからみて変化がみられること、2つめは、1999年から2008年に行った性別判断調査に関し、判断結果については、同じ傾向がみられるものの、その判断理由にジェンダーからみて変化がみられてきたことである。これは、この10年間に生じた日本社会の産業構造の変化が、新聞投書の内容やジェンダー意識に変化をもたらしたものであると思われる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	420,000	2,520,000

研究分野：社会言語学

科研費の分科・細目：(分科) 言語学 (細目) 言語学

キーワード：新聞投書、ジェンダー意識、文体、社会言語学

1. 研究開始当初の背景

私は、1996年以降、新聞投書を対象に調査・研究を行ってきた（その一部は、2000年～2001年「新聞投書とジェンダー意識の調査・研究」科学研究費補助金による成果報告書がある）。もともとのきっかけは、新聞投書を利用したジェンダー意識への気づきというものであった。たまたま、新聞投書の書き手の個人情報を除いて、書き手の性を判断するとどうなるのかという単純な動機であったが、結果はその想像を越え、女性（男性）と思う理由づけに、判断者のジェンダー意識が見事に表出されていた。そこで、その調査と

並行して、新聞投書自体の文体・内容にジェンダーがみられるかどうか、戦後から現在までを対象に調査する作業を行ってきた。今回はそのような調査を再検討し、社会変化と新聞投書の文体・内容、そしてそれらを読み解く側のジェンダー意識との3者の相関関係をみていくことを主眼にすえた。調査対象期間を過去10年間に絞り実施することにした。この10年間における日本社会は、高度経済成長を遂げたあとに訪れたバブル崩壊後、それまでの政治や経済などで行われてきた日本型システムが破たんしてきたことがわかる事態や事件が次々と起きた時期だといえ

る。2001年9月におきたアメリカでの「同時多発テロ」も同様に、それまでの社会システムの破たんのはじまりを示す象徴的な事態であったと思われる。ちなみに、新聞投書は、メディアリテラシー教育として採用できると考えている。

2. 研究の目的

本研究は、3年間という期間において、新聞投書を利用して、次の2点を明らかにし、さらには、教育的活用に向けた方向づけを考えることを目的としている。まず、第一点として、1998年から2008年という10年間において、新聞投書がどのように変化してきたか、第二点として、1999年から2008年に実施した、新聞投書を利用した性別判断調査の回答にどのような変化がみられるのかということである。

これらの調査から、新聞投書が社会意識（特にジェンダー意識）とどのような相関関係を持っているのかを明らかにすることである。そして、そのことから、新聞投書を教育現場でより身近なものにするための（メディアリテラシーも含めた）活用方法を検討するということが、最終目標である。

3. 研究の方法

本研究を行う方法は、次の2点にまとめられる。

(1) 全国紙である「朝日」「毎日」「読売」（縮刷版）に、1998年から2008年にかけて掲載された新聞投書について、文体と内容を中心に分析し、ジェンダーがあるかどうかみていく。詳しくいえば、文体については、「ですます体」、会話口調、願望表現、などがあるかどうか、内容については、家族や親戚など身内のことに触れているか、経済・政治・政府・国際などいわゆる「公的」なテーマをあつかっているか、それとも、家庭・育児・生活など、「私的」なテーマを扱っているのか、また、内容の展開にジェンダーがみられるかといった観点からチェックしていく。

(2) 1999年から2008年にかけて、大学生を対象に毎年実施してきた、山一証券自主廃業関連の新聞投書（8通）をめぐる性別判断調査の結果の分析を行う。性別判断調査とは、投書の書き手の個人情報（氏名、年齢、職業、住所）を除いたものを読み、書き手の性を推測し、その判断理由をあげるという作業である。

4. 研究成果

当初の計画では、10年間の全国紙に掲載された全投書を調査することであった。しかし、本研究に取り組み始めて気づいたことは、その対象となる投書資料の膨大さであった。全

て調査するのは、3年間では不可能であり、今回は、限定的な形でしか達成できなかった。その他反省点は様々あるが、今回は、区切りの報告として、まず、10年間における新聞投書の大体の動向についてまとめ、次に、9年間にわたる性別判断調査にみられる意識の変化を1999年度と2008年度の調査をもとに述べていく。

(1) 新聞投書の投稿数での変化

まず、新聞投書をめぐる変化について、数字の上から3点にまとめる。これらは、「朝日」をもとに報告する。

まず1点目は、1956年と2008年を比較すると、女性の投稿、掲載数が激増しているということである。掲載数では、男性は1,7倍、女性は7,1倍となっている。2点目に、投稿数の動向についてみてみたい。2004年に男女差が一番縮まっている。女性からの投稿が全体の42%まで上がっている。投稿のピークは、男性の場合2001年であり、女性の場合は、2004年である。3点目に、掲載数についてみてみると、女性は、1997年に1000通を越え、2000年がピークである。また、男女比からみてみると、1999年に逆転し、女性の投書の方が多く掲載されるようになり、これが、2004年まで6年間続いている。以上のような数字からみえてくるのは、1998年から2008年の10年間について、投書の世界にも社会の動きが反映しているということである。その中の大きな要因の一つは、1999年に男女共同参画社会基本法が成立し、日本社会において女性の地位向上を志向するムードが高まってきたといえる時期である。それが、新聞投書の投稿数や掲載数の影響を与えている。

(2) 新聞投書の内容上の変化

新聞投書の文体やテーマについては紙面の関係上、割愛する。

新聞投書の内容の展開については、すでに拙稿で取り上げてきたものを含めて、まとめていく。この10年間におきた大企業の経営破たんや不祥事に関連した新聞投書を考察した結果、次のことが分かった。まず、1997年の山一証券自主廃業関連の新聞投書にみられるジェンダーは、「男性は批判し、女性は励ます」という、大企業を支えた性別役割分業をまさに体現するものとなっている。つまり、男性の投書は、経営破たんをおこした大企業の経営の仕方や、政府・政治の無策を批判し、一方で、山一証券という一企業を取り上げすぎているといったメディア批判を中心としている。女性の投書は、破たんする企業の社員やその家族への励ましが中心的に語られ、「頑張って」というフレーズが随所に使われているのが特徴である。

次に、雪印による 2000 年の牛乳食中毒事件と 2002 年の牛肉偽装事件、そして JR 西日本鉄道の脱線事故についてまとめる。これらについても、先にみた山一証券自主廃業関連の投書と同様に、典型的なジェンダーがみえてくる。つまり、男性の投書は、会社組織や経営に対する批判が中心で、女性の投書は、社員への励ましや消費者としての体験が中心に書かれている。証券会社、食品会社、鉄道会社と職種は違うが、大企業の破たんや不祥事ということでは共通しており、それら大企業がおこした出来事の大きさが投書に反映している。そして、大企業を支えてきた性別役割分業が投書に如実に反映され、投書内容にジェンダーがみえてくるものとなっている。

しかし、投書内容とジェンダーに関して、時代の変化を加味すると、少しずつ変化のきざしがみえてきていることを指摘したい。これまで一般的に、「男は仕事、女は家庭」という性別分業が投書の場合にもあてはまり、男性は政治や経済などの「公的」なものを扱い、女性は家族や子育て、家事など「私的」なものを扱うといった、内容の性別分業がありそうだと語られてきたし、今でも、そのような発想が主流である。しかし、今回の 3 年間の調査期間において身に染みて分かったことの一つは、少なくとも、投書内容を一概に「経済」「政治」「家庭」などに単純に分類できるものではないということである。

つまり、私たちをとりまく社会や経済状況、政治状況の複雑化、閉塞化といった状況に呼応して、投書内容も多面的になってきており、女性だからといって、「私的」なテーマに終始することなく、男性だからといって、「公的」なテーマのみに関心を向けているばかりではないということがいえる。

これも、この 10 年間、これまでの日本型システムが破たんし、良くも悪くも、男女双方に、意識の変更がせまられてきたことが大きな要因ではないかと思われる。年金、医療費、教育費など特に生活に関わる金銭的な切迫感が生じ、一人ひとりが真剣に考えていかなければならなくなってきた時代になったからではないかと考える。

(3) 性別判断調査の結果の検討

今回は、1999 年から 2008 年の現在にいたるまで、大学生を対象に行なってきた調査について、1999 年と 2008 年の結果を比較し、その判断された性や判断理由から、読み手である大学生のジェンダー意識に変化がみられたかどうか考察していく。

まず、男女両方の回答結果からいえることは、第一に、特に個人的な内容がある投書については、書き手の性が正しく判断できているということ、つまり、1999 年当時も、2008

年の今も、投書内容が理解でき、男女の置かれた具体的な状況が把握できているということがいえる。つまり、今日において、社会における男女の平等が若干でも改善されてはいるものの、1997 年当時と同様の社会的状況が強くあるため、読み手である大学生は、適切に判断できたのではないかと考える。

第二に、2008 年の調査では、書き手の性が判断できないとするものが増えたということがあげられる。これについては、9 年前の出来事を扱っている投書のため、その出来事自体への理解が不十分になる分、判断がつきかねるということもあるだろう。しかし、女性の回答者の中には、書き手の性の判断をすること自体、差別的発想につながってしまうのではないかと、調査自体への懸念を吐露しているものが少なくない。つまり、判断作業をしていくと、男性の投書は理論的・客観的だと感じ、女性の投書は感情的・主観的だと感じるということが、居心地のいいものでないということを示している。女性回答者が、女性の書き手に対して、否定的なイメージを抱いてしまうことの矛盾である。この点については、調査後、調査の意味を丁寧に説明し、その後のジェンダーについて考えていく教育で対応するように工夫を行っている。

今回の判断調査の理由にも変化がみられる。具体的にいえば、「40 歳すぎてまで働くので男性」とか、「子持ちの既婚女性の友人は女性」という従来のジェンダー的な発想によって書き手の性を判断している割合に変化がみられる。女性と判断した理由にある「子持ちの既婚女性が友人」であるとする男性回答者以外のすべての項目について、1999 年より 2008 年の方が「～だから女性(男性)」という判断理由をあげる割合が明らかに減っている。つまり、これまでのジェンダー意識が少し薄まってきているものと考えられる。

この変化を読み解けば、可能性として、「40 歳すぎてまで働く女性」「役員をする女性」「子持ちの既婚女性と友人になる男性」「母親思いの男性(マザコンではなく)」という認識が生じてくる社会状況が確実に作られてきているものと期待したい。従来の「女性は専業主婦」といったような認識が徐々に薄まる社会状況があるのだろう。

(4) まとめ

今回の約 10 年間に限定した新聞投書をめぐる調査・研究からいえることは、社会変化とジェンダー意識の変化の相関関係を探ることを目的として行ってきたが、新聞投書を教育的に活用することが有効であると考えられる結論に至った。新聞投書の文体・内容や新聞投書を利用した判断調査で示されたジェンダー意識が、当然のことながら、社会の変

化に呼応して、変化していくものであることも確認できた。

最後に、これはいくら感謝してもしきれないが、今回の一連の調査に快く応じてくれた大学生の皆さんに感謝したい。大学生の皆さんの参加がなければ、この調査・研究は不可能であった。また、新聞投書をはじめ言語学、ジェンダーを含む社会科学の知識などについて、様々な方々からご指導をいただいたことについても、感謝したい。

(5) 補足

なお、今回の調査・研究においてさらに、2006年にイギリスで新聞投書に関するインタビュー(16名)を行うことができた。また、社会言語学的関心から、新聞投書を利用して、1955年から1994年にかけて、方言に関する投書を収集し、方言に対する態度がどのように変化してきたのか調査した。これを含めて、今回の調査・研究については、研究成果報告書「新聞投書の教育的活用に向けた調査・研究」(平成21年3月)にまとめている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ①熊谷滋子、女性政治家とメディア、社会文化研究、11号、79-103、2009、査読有。
- ②Shigeko Kumagai, Standard Japanese and Heteronormativity, Proceedings of International Gender and Language 5. DVD, 2008. Screened.
- ③熊谷滋子、国語学研究者の姿勢について考える、情報問題研究、19号、19-28、2007、査読無。
- ④Shigeko Kumagai, awareness of gendered image through written Japanese, abstract, 10th International Pragmatics Association, 118-119, 2007, Screened.
- ⑤熊谷滋子、「美しい」女性になるためのことば遣いをめぐって、情報問題研究、18号、133-39、2006、査読無。
- ⑥熊谷滋子、丁寧さの奥にあるものは(訳者あとがき)、サラ・ミルズ著、言語学とジェンダーへの問い、325-33、明石書店、2006。

[学会発表] (計 3 件)

- ①熊谷滋子、東北方言の社会方言化とジェンダー、ワークショップ「日本語をジェンダーから考える」、第10回日本語用論学会、松山大学、2008年12月21日。
- ②Shigeko Kumagai, Standard Japanese and Heteronormativity, 10th International Gender and Language Association 5,

Victoria University of Wellington, New Zealand, 3 July, 2008.

③Shigeko Kumagai, Awareness of gendered image through written Japanese, 10th international Pragmatics Conference, University of Goteborg, Sweden, 13 July, 2007.

[図書] (計 3 件)

- ①熊谷滋子、方言とジェンダー、「ジェンダーで学ぶ言語学」、世界思想社、印刷中。
- ②熊谷滋子、思いを熱く共有しあった場としてのシンポジウム、遠藤織枝編著「ことばとジェンダーの未来図」、131-148、明石書店、2007。
- ③熊谷滋子、投書でかなんことはかなんと言おう、遠藤織枝編著、「女とことば」、韓国語翻訳版、187-195、2006。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 滋子 (KUMAGAI SHIGEKO)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：30195515

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし